

リュブリャナ大学日本研究コースの 学生プロジェクト紹介

クリスティナ・フメリヤク寒川（リュブリャナ大学）
守時なぎさ（リュブリャナ大学）
カティヤ・プレダリッチ（リュブリャナ大学生）
アナ・ラジンゲル（リュブリャナ大学生）

【要約】

リュブリャナ大学文学部アジア研究学科では、学生が自ら設定したテーマにもとづき、実践的に学びを深めるインターンシップを実施している。本稿では、連絡会議で発表をした学生の二つの活動を紹介する。その活動とは、2024/25年度に実施された「廊下の図書館」の再編と中級日本語学習者向け多読教材の制作である。学生は、図書整理、読解教材開発、文化紹介などを通して主体的に課題を設定し、それを解決するという活動を教師の支援のもとに行なった。これらの活動は、教育現場という環境の中で学習者の自律性を高め、専門性と社会性を統合的に育成する場として重要な役割を果たしている。

1. はじめに

リュブリャナ大学文学部アジア研究学科では、学士課程・修士課程を通して「インターンシップ」科目を設け、学生が大学外または学内で主体的に学びを深める機会を提供している。この活動は、学生自身が設定したテーマにもとづいて、指導教員の助言を受けながら一定期間にわたって計画的に取り組むものである。学士課程プログラムでは180時間の活動に対して6 ECTSが、修士課程プログラムでは90時間の活動に対して3 ECTSが付与される。活動終了後には、学生がインターンシップの過程でどのような活動を行い、それぞれにどれほどの時間を費やしたか、またその経験から何を得たのかを整理して記述する修了レポートの提出が求められる。

スロベニアでは、日本語や日本文化に直接関連した企業・団体の数が多くない。たとえば日系企業、日本と取引のある企業、日本製品を扱う飲食店や雑貨店などは首都リュブリャナでも数えるほどで、一般にイメージされるような「企業での職場体験型インターンシップ」を行うことは必ずしも容易ではない。したがって、当学科のインターンシップでは、こうした外部環境の制約を前提とし、学生が自らの取り組みの中で課題を見つけ、その課題に向き合う姿勢や自律的な問題解決の力を育成することに重点を置いている。また、社会に出てから求められる適応力、情報発信力、他者との協働性を実践的に身につける場として位置づけ、専門性と社会性の両面を涵養することを目指している。

2024/25年度には、次の4つのインターンシップ・プロジェクトが実施された。いずれも学生が自ら企画し、教員と相談しながら形にしていった取り組みである。

- (1) 廊下の図書館
- (2) 中級日本語学習者のための多読教材作成
- (3) 初級日本語学習者のための多読教材作成
- (4) 学習者コーパスのデータ整理

これらは、言語教育、教材開発、学習支援、研究基盤の整備など、多様な方向から日本語教育に貢献するものであった。そのうち連絡会議では、「(1) 廊下の図書館」と「(2) 中級日本語学習者のための多読教材作成」についてこれに取り組んだ学生が概要を発表した。本稿では、その内容と取り組みの特徴、学生が得た学びを中心に、インターンシップの効果について考察する。

2. 廊下の図書館

文責：カティア・プレダリッチ、アナ・ラジンゲル

選択科目において私たちを含む5人の学生は2024/25学年度の始まりに、『廊下の図書館』とよばれた廊下に設置された図書コーナーの再編プロジェクトに取り組んだ。

まず、『廊下の図書館』のプロジェクトが必要とされた理由を述べる。全体は非常に非組織的であった。多くの本が箱に入ったまま放置され、本の一覧リストがなく、学生が貸し出した本を記入するためのノートも無秩序であった。この非組織を示す例として、ある本が誤って英語学の図書館に紛れ込んでいたこともあった。棚に並べられた本は散乱して混在しており、棚自体も古く、廊下の空間を十分に活用できていなかった。そのため、プロジェクトの前に新しい本棚が購入された。



写真1：前の本棚

このプロジェクトの目的は大きく二つあった。それは、本を体系的に並べることと、カタログの作成である。一つ目には、箱に入った本を棚に並べ、UDCという図書システムを使って配列し、文学の本は作者名の五十音順に並べることである。UDC（十進分類法）とは、本の内容を数字で表して分類する国際的な方法である。分野ごとに決まった番号があるので、本の内容が分かりやすくなり、整理や検索がしやすくなる。

二つ目の目的、カタログを作成するためにはLibrarythingというウェブサイトとアプリを使い、すべての本を登録した。LibraryThingを選んだ理由は、無料で利用でき、操作が非常に簡単であることに加えて、本をバーコードスキャンで登録できるモバイルアプリが提供されているためである。

プロジェクトを進める中で、いくつかの小さな作業も追加した。たとえば、すでにカタログに登録した本には、区別しやすいようにカラーテープを貼ることにした。また、返却された本を簡単に棚に戻せるように、表紙の後ろにローマ字でタイトルと作者名を書くことにした。さらに、より簡単に本を並べられるよう、背表紙にも目印を付けることにし

た。専門書には UDC 番号、文学作品には作者名の最初のひらがな、その他の本にはそれぞれのカテゴリの頭文字を使うことを決めた。

作業は、『廊下の図書館』で定期的にミーティングを行い、その日に何かをすることを決める形で進められた。作業は時々個人で、時々ペアやグループで行っていた。ほとんどの場合は対面、または自宅で個人でカタログの整理することも多かった。

ほとんどの目標はできた。棚や箱にあった本を全部棚に並べ、ラベルもつけた。カタログに登録した本にはカラーテープで印をつけて、最初のページには鉛筆でローマ字で作者名とタイトルを書いた。それから、ほとんどの本は LibraryThing にも登録した。でも、貸出システムの完全な改訂はできなかった。その代わりに、新しい貸出ノートを作って、どう書けばいいかノートの中に説明を書いた。これは、来年この棚を使う学生たちが簡単に使えるように考えたシステムだ。学年度の終わりには、整理した図書館を学生たちに紹介した。ほとんどの人は図書館の存在を知らなかったし、問題点にも気づいていなかった。でも、紹介した後は、より多くの学生が来るようになった。

まだやることはいくつか残っている。図書館ではだいぶ改善できたが、全部は終わっていないので、次の世代に引き継ぐ部分もある。

今、本とカタログの整理は進んでいるが、まだ課題が残っている。まず、貸出ノートを確認して、本が返されているかどうかチェックすること。次に、不要だと思われる本の整理をすること。三つ目は、新しい貸出システムをほかの学生に説明して、実際に使い始めてもらうこと。そして最後に、学生たちが本棚をもっと上手に使えるように工夫すること。

このプロジェクトを通して、本の整理やカタログ作りの大切さがよくわかったし、みんなで協力する楽しさも経験できた。これからも、「廊下の図書館」をもっと便利で使いやすくしていきたい。

3. 中級日本語学習者のための多読教材作成

発表者の学生が取り組んだのは、中級日本語学習者を対象とした多読教材の作成である。多読が外国語教育において広く注目されるようになった背景には、Mason & Krashen (1997) や Bell (1998) による研究の影響が大きい。ここで提案されているのは、自分の能力より少し高めの理解可能な内容を大量に読むことによって、語彙力・文法力・理解力を向上させる、また学習意欲も高めるという考えである。これは Krashen (1989) のインプット仮説、すなわち「 $\alpha+1$ 」の理解可能なインプットが語学能力の向上に効果的だという考え方に基づく。

日本語教育の分野における「多読」は、一般的に、栗野ほか (2012) が示した次の四つのルールに基づいて行われる。

1. やさしいものから読む
2. 辞書は引かずに読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったらやめて他の本に移る

多読は、元来教室内の活動であるが、多読と類似した活動が日本語教育のさまざまな教育現場や課外活動に取り入れられている。この時、教室で参加者が同時に読むという活動ではなく、「読む」ということを中核として行う活動である。たとえば国際交流基金では定期的に「JF オンライン読書会」

を行なっている。これは、あらかじめ課題図書を読んできて、その内容について話し合うイベントである。またNPO多言語多読は同じくオンラインで「にほんごたどく」を行い、学習者に多読を広げるとともに、日本語教育関係者に多読教材の作成も奨励している。

しかし、多読教材の作成は、日本語教育関係者や教師のためだけの活動ではない。学習者の中には、自らの興味関心に応じて「読書」を純粹に受容的に享受する者もいれば、読み物の内容や形式を自ら創作する産出的活動へと転換する者もいる。また産出的活動の過程で、文字情報にとどまらず、学習者が得意とするイラストや写真を添えたり音声を付与したりして、視覚・聴覚を活用した多感覚的な読み物を作成する学生もいる。さらに、こうした創作物を自身が教授するクラスに教材として持ち込み、授業の一部として活用しようとする例も見られる。(3)初級日本語学習者のための多読教材作成を行なったインターンシップ履修生は、自分が担当する日本語コースの受講生にマルチメディアの読み物を作成し、語彙練習、聴解練習、読解練習など複数の機能をつけた読解教材を作り上げた。それに加えて、受講生が自ら読解教材を作れるように、教材のテンプレート作成も企てているところである¹。これは、読解という活動を、読解教材作成という産出活動に変換するだけでなく、年長者受講生のデジタル・テクノロジーへの取り組み参与も意図しており、自律学習・生涯学習にもつながる活動として興味深い。

次に、本小節では連絡会議でインターンシップ履修生が発表した中級学習者を対象とする読み物教材について紹介する。この教材を作成した発表者は、ホラー小説や心理小説といったジャンルに興味を持っていた。かねてから、中級レベルの日本語学習者が無理なく読め、かつ自身の興味に合致する面白い読み物が少ないことを残念に感じていた。入手可能な読み物としては、昔話や日常生活を扱ったものが多い一方で、青少年向けを対象とする内容を楽しめる読み物が限られていたことから、インターンシップでの活動として自らホラー小説風の多読教材を作成することを決意した。

さらに、この発表者はイラストを描くことも好きであったため、物語の雰囲気伝えるために自作のイラストを物語に添え、視覚的にも読者を引き込む工夫を施した。こうして制作された教材が、上に示した読み

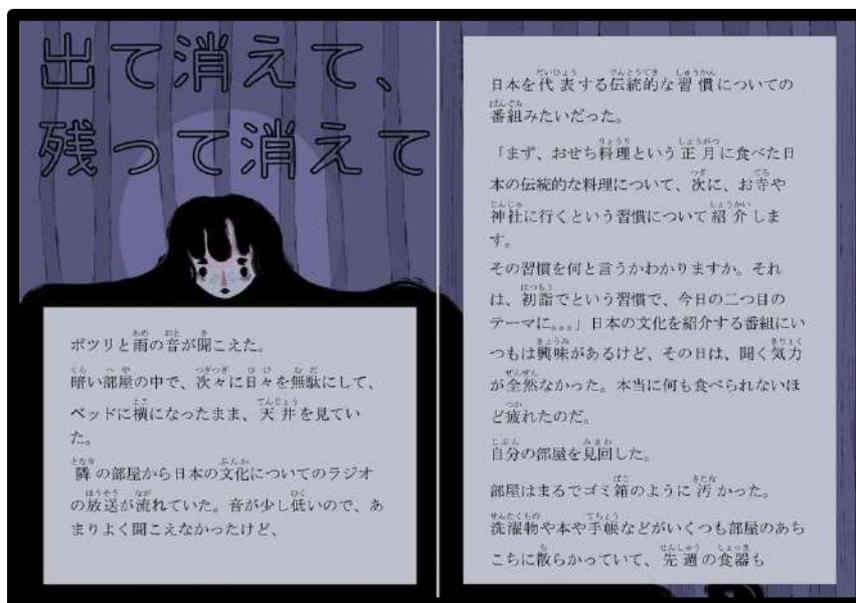


図1：読み物教材冒頭の部分

¹ これについては、「学習者が『作り、共有する』多読活動の試み」として「中東欧日本語教育研修会2026」（2026年2月22日国際交流基金ブダペスト日本文化センターにて開催 <https://sites.google.com/view/chinikike2026/home?authuser=0>）で実践報告の発表が行われた。

物である。

それに加えて、発表者は読み物に日本文化や風習を紹介する要素も盛り込みたいと考えた。そのため、「お節料理」「畳」などの文化要素に関する説明を挿入したほか、「引きこもり」といった現代日本における社会問題も取り上げ、内容面での多様性と深みを持たせた。読者に楽しんでもらうと同時に、文化的知識や社会的情報を自然な形で学べるよう意図した構成である。

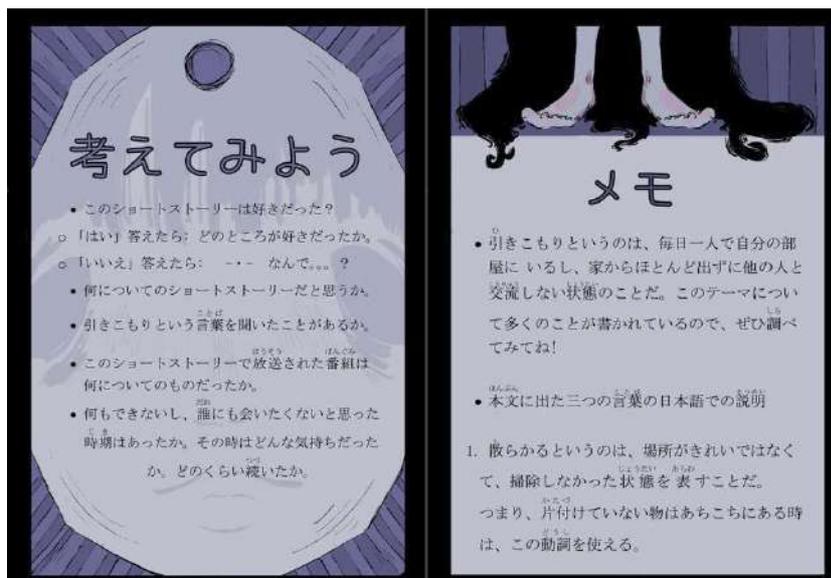


図2：読み物教材 話の最後の部分

日本語学習という観点からも配慮を行い、語彙リストの作成、「引きこもり」のように概念理解が求められる語句とその内容の説明、内容理解の確認問題など、学習の補助となる項目も整備した。さらに、中級以上の漢字や読者が難しいと感じる可能性のある語には振り仮名を付し、文脈の中から語彙学習や意味の推測が行えるようにした。以上のように、教材に盛り込まれた様々な工夫は、作成者自身が「学習者として」必要だと感じた内容や機能に基づくものである。それを教員の教育的観点からの助言と調整しつつ、発表者は読み物教材として形にしていたものである。

このような教材は、学習者の視点が反映されていて教材としては大変面白く意図的な工夫が反映されている。ただし、現実的にはその工夫は個人的な嗜好にとどまり、多くの学習者に理解しにくい算出になることがある。指導者はより汎用性の高い読解教材という視点から、軌道修正を行ったり異なった視点を持ち込んだりする必要がある。発表者自身も、デジタル形式で制作した読み物をインターネット上で公開する方法、あるいは印刷して大学の「廊下の図書館」などに配置し、クラスメートが自由に手に取れるようにする方法を検討していることから、指導者は学習者と社会をつなげるような具体的な助言を行う好機と捉えることもできる。また、読み物教材作成の際には著作権等に関する配慮が必要であり、どの範囲まで公開できるか、指導者とともに検討していくことが求められる。

4. インターンシップから自律的活動へ

リュブリャナ大学文学部アジア研究学科のインターンシップは、学生が自ら設定したテーマに基づき、教員の助言や支援を受けながら1年間にわたって取り組む実践活動である。どのテーマも、当初は漠然とした着想にすぎないことが多い。しかし、担当教員との面談やゼミ形式での議論、グループディスカッションなどを重ねていくうちに、次第に具体的で達成可能な目的へと形を整えていく。

学生は、その目的に近づくために小さな目標を段階的に設定し、そこで生じる課題の一つひとつ取り組んでいく。このように、あらかじめ固定されたシラバスや内容に縛られず、自ら課題を設定して進める活動は、彼らにとって問題解決能力や自律的遂行力を伸ばす絶好の機会となる。さらに、その

プロセスにおいて教員が「支援者」「伴走者」として関わることには、教育的な喜びが大きい。さらに、この活動では学生のアイデアを社会と繋げる良い機会と位置付けることも可能である。これまでのインターンシップでは、学習者作文の整理が発展して卒業論文につながった例や、研究会での発表に発展した例、あるいは事前準備を重ねて外部施設における通訳活動を成功させた例など、学生の初期の想念が教育プロセスの内外で異なる形となって実を結んだ事例が数多くみられる。

指導者は、学生の活動プロセスに直接介入して作業を指示するのではなく、あくまで助言者として関わり、最終的な決定権は学生自身に委ねる。学生は、自らの選択に責任を持ちながら、周囲の人々や自分の判断がもたらす影響にも配慮しつつ、活動を主体的に進めていく。このような姿勢は、学習者が学術的にも社会的にも成熟していくうえで、非常に重要な態度であると言える。インターンシップは単なる科目ではなく、学習者の主体性を中心に据えた教育実践であり、今後も多様なテーマや方法を取り込みながら、より深い学びを生み出す場として発展していくことが期待される。

参考文献

- 栗野真紀子・川本かず子・松田緑（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版
- Bell, T. (1998) Extensive reading: Why? and how. *The Internet TESL Journal*, 4(12), 1-6.
- Krashen, S. (1989) We Acquire Vocabulary and Spelling by Reading: Additional Evidence for the Input Hypothesis, *The Modern Language Journal*, Vol. 73, No. 4 (Winter, 1989), 440-464
- Mason, B., & Krashen, S. (1997). Extensive reading in English as a foreign language. *System*, 25(1), 91-102.